

## 6 越中国府関連遺跡と<sup>け た じん じゃ</sup>氣多神社に見る歴史的風致

### (1) はじめに

本市の北部地区は、古代には越中の国府が置かれるなど、古くから越中の政治・経済の中心として栄えた地であり、当時国守として赴任した万葉集の代表的歌人・大伴家持<sup>おおもとのやかもち</sup>が、その風光明媚な自然に感動し多くの秀歌を残した景勝地でもある。その中でも氣多神社を含む周辺の地区は、二上山の東麓<sup>ふたがみやま</sup>にあり、山裾は非常に落ち着いた雰囲気である。また、同神社境内地の一角に「越中総社跡伝承地」として越中総社が建立されていたと伝えられており、古からの神域として非常に厳かな雰囲気に包まれている。

### (2) 歴史的風致を形成する建造物等

#### (<sup>け た じん じゃ</sup>氣多神社の<sup>しゆん きれいたいさい</sup>春季例大祭に関連)

##### ①<sup>け た じん じゃ ほん で ん</sup>氣多神社本殿

延長5年(927)に完成した『延喜式神名帳』<sup>えんぎしきしんめいちよう</sup>に記載された神社は「式内社」と称されているが、この<sup>け た じん じゃ</sup>氣多神社は越中国内の式内社三十四座の一つに数えられ、昭和6年(1931)に重要文化財となった。

現在の本殿は、永禄年間(1558～1569)に再建されたと伝えられており、三間社流れ造り、こけら板葺きで、正面に1間の向拝を付けている。



氣多神社

##### ②<sup>えつちゆうこくぶん じ あと</sup>越中国分寺跡

国分寺は、聖武天皇が仏教の力による国家安寧を願って天平13年(741)に「<sup>こくぶん じ こん</sup>国分寺建立の詔」<sup>りゆう みことり</sup>を発し、全国的に建立され始めた。

<sup>えつちゆうこくぶん じ あと</sup>越中国分寺跡は、昭和40年(1965)に県の史跡に指定されている。昭和41年(1966)に発掘調査が実施され、建物の基礎工事の痕跡が確認されるとともに、国分寺に葺かれた瓦や当時使用された食器等が出土している。



越中国分寺跡

### （3）歴史的風致を形成する活動

#### 氣多神社の春季例大祭

氣多神社の春季例大祭は、地元では「ダゴ祭り」と呼ばれ、氏子の家々では小豆入りの「とぼ草餅」を作って神様をもてなし、祭りを賑々しく盛り上げている。以前は神社の裏山に登り、桜や椿の花を愛で、酒肴を飲食し、円座になって一日を楽しむ「山ゆき」と称される行事が行われていたが、これは山の神を里の田畑や各家々の生業の神として迎えた名残と言われている。

氣多神社の春季例大祭で行われるにらみ獅子は毎年4月に行われる。氣多神社奉賛会が作成した小冊子に昭和40年代頃の古写真が掲載されており、平成8年(1996)に「氣多神社のにらみ獅子」として市指定の無形民俗文化財となった。

#### i) にらみ獅子について

にらみ獅子は、社殿前で奉納される獅子舞で、昔から伝承されている素朴なものである。にらみ獅子の大きな特徴は、獅子の相手をする天狗がないことである。獅子は百足獅子で、獅子方は藍染無地の着物の着流しであるが、頭持ちだけは、野袴を着用している。楽器はしめ太鼓と横笛である。獅子は、ゆるやかなテンポで右から左、左から右、右から左と進み出て、神殿に向か



にらみ獅子の様子

って首をのぼし、外に向かって後方90度位首を回して神殿の外を睨む。観衆は、その様に怖くなり身がすくむほどである。その後、向きを神殿に変え、更に睨む。にらみ獅子に睨まれるとその年の厄が祓われるといわれており、小刻みに頭を震わせ、地を這うように神前に進む様子は、荘厳さと清純さを持ち合わせている。このにらみ獅子の舞は、ゆったりとしたお祓いをする舞い方であり、現在のテンポの早い獅子舞になる以前の形であるため、にらみ獅子という名称がその趣旨をよく表現しているとともに、古い獅子舞形式を知る上で貴重な事例である。

## ii) 当日

当日は、社務所での奉幣使出立の儀より始まる。氣多神の使いという雉子を描いた雉子旗を先頭に、紫・白・赤・黄・緑の五色の流れ旗が続き、その後、にらみ獅子が拝殿広場に向かって進む。囃子方は笛と太鼓で伝承の七節を奏でながら獅子に従い、衣冠束帯の奉幣使・唐櫃・神主・氏子総代・役員が後続の行列を形作り、社務所より参道を登りつめ、拝殿前に進む。



にらみ獅子の様子

次に、神輿渡御の儀が始まる。拝殿に着いて奉幣と厳粛な神事が本殿で執り行われた後、依代（御神体）が拝殿前に控えている神輿に乗り、渡御が始まる。列の順序は雉子旗、五色の旗、囃子方、神職、神輿、祭主、紋付姿の氏子総代、役員などが続く。行列は拝殿前から拝授所前を経由して坂道を下り神殿に向かう。かつて氣多神を除く越中のすべての祭神を奉斎するお宮があったと伝承され、ここを参拝することで、越中国内を一巡したことになるのだと伝えられている。

行列は、この聖地を3回半（もとは7回半）巡る。祭主と氏子総代・役員が拝礼したあと、列は石段を上って拝殿前に戻り、依代（御神体）が神輿から本殿に移され、そのあとにらみ獅子が奉納される。

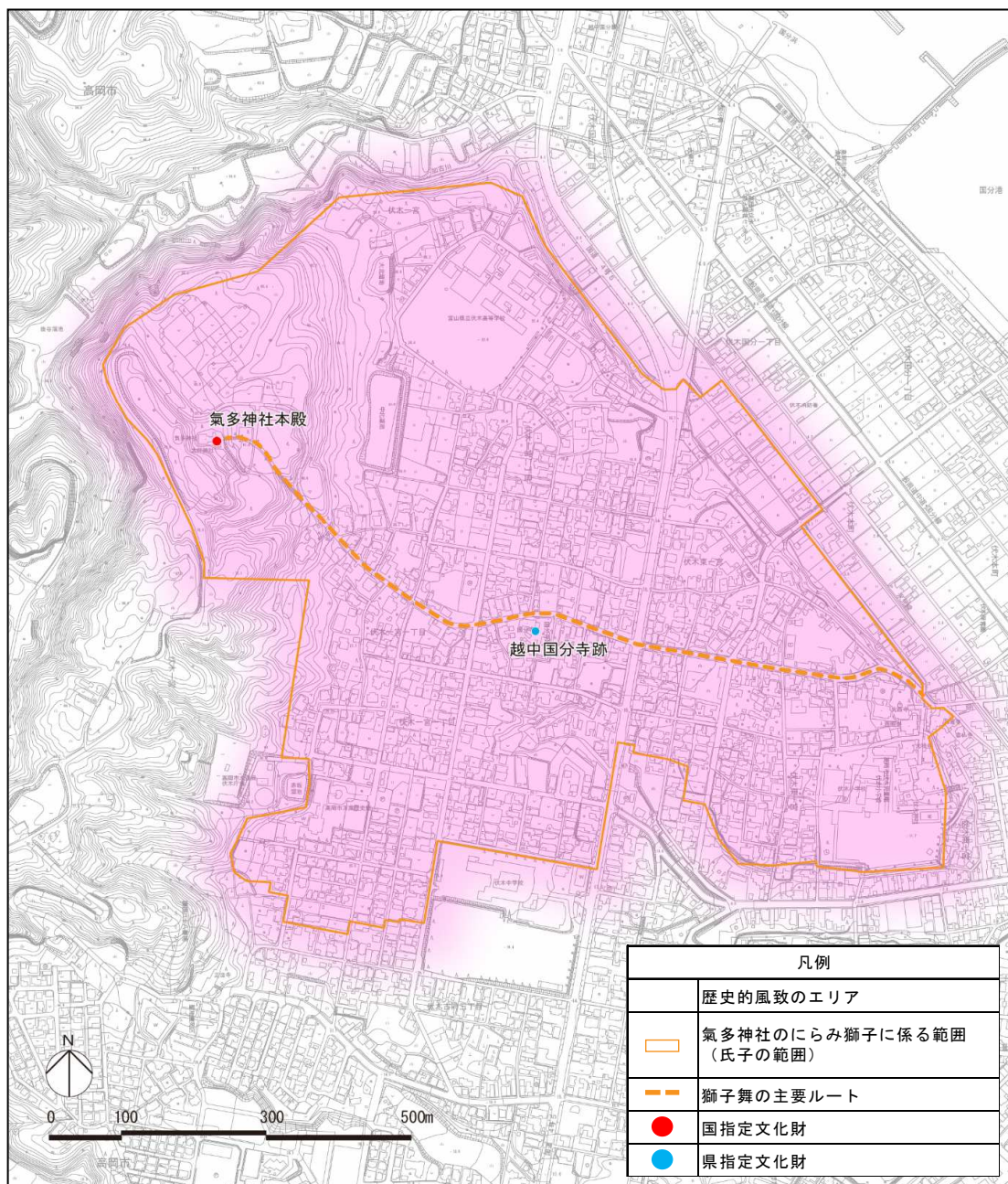
にらみ獅子が奉納された後は、賑やかな現在の祭礼獅子が次々に奉納され、越中国分寺跡を含む氏子の家々を巡る。年々により巡る家は変わり、特に、結婚や新築などめでたいことがあった家は獅子を招待する。その際は、幔幕を飾り、花紙と花（祝儀）を用意し、獅子方を待つ。花紙には、「目録〇〇より〇〇獅子方さん江」といったように書き上げられ、鯛を持った恵比寿の絵も描かれる。花が打たれると、獅子方が花紙に書かれた目録をあけ、威勢よく述べる。獅子は、囃子方の長胴太鼓と横笛の音色に合わせ、玄関先で舞い、その家の厄を払う。その賑やかな雰囲気誘われて、非日常的な光景を見るために集まってくる人々の歓声と「イヤサー、イヤサー」の掛け声が、特徴のある風情としてこの地域に浸透している。



祭礼獅子の様子

## (4) まとめ

氣多神社<sup>け た じん じや</sup>で行われる春季例大祭では、藍染無地の着物の着流しの獅子方と囃子方により、ゆったりとしたお祓いをするかのような舞い方で舞うにらみ獅子<sup>じ し</sup>が社殿前で奉納された後、越中国分寺跡<sup>え っ ち ゅ う こ く ぶ ん じ あ と</sup>を含む氏子の家々を長胴太鼓と横笛の音色に合わせて舞う祭礼獅子が巡る。その賑やかな雰囲気によって誘われて集まってくる人々の歓声と「イヤサー、イヤサー」の掛け声により、普段はのどかな雰囲気に包まれている周辺の住宅街において一体的な盛り上がりが見られ、良好な歴史的風致を形成している。



図：越中国府関連遺跡と氣多神社に見る歴史的風致